

一期一会

自律 目標に向かって自分自身を律する
感謝 思いやりや感謝の気持ちをもつ
貢献 将来社会に貢献する態度を養う

2021.7.21 第16号



夏休みに入ります

中学生の川柳に「親を見りや 僕の将来 知れたもの」とか、「十四年 父の無能を 吹き込まれ ようやく分かった 母の愚かさ」という歌があるそうです。

また、高校の国語の先生が、生徒に「父よ！母よ！」という題で「一行詩」を書かせたところ、こんな作品が提出されたというのも見ました。

「父よ！言いたいことがあったらはっきり言え 母よ！言いたいことをそのまま言うなよ。」(男子生徒)

「母よ！つべこべ言うけど、あんたの息子はええほうやで。」(男子生徒)

まったく、言いたい放題の感じですが。私も親の一人。我が子が可愛くない親がいらっしゃいますか。また、子のほうも、口や態度ではともかく、心の中で親を慕わない子がいらっしゃいますか。やがて、社会に出て数々の体験をするうちに、この子たちも人の道が分かってくると信じています。

平成5年に福井県丸岡町主催で「日本一、短い母への手紙」というのを募集したところ、心の温まる多くの作品が寄せられ、隠れたベストセラーになりました。

・あなたから もらったものは数多く、
返せるものはとても少ない。 (女性 21 歳)
・あなたを鬱陶しく思う時が、
私は幸せなのかもしれませんね。
明日、帰ります。 (女性 22 歳)
・おふくろ、死ぬなよ。
いいと言うまで死ぬなよ。
親孝行が全部終わるまで死ぬなよ。(男性 28 歳)

・おかあさん、
雪の降る夜に私を産んで下さってありがとう。
もうすぐ雪ですね。 (男性 51 歳)
・お母さん。
知らないうちにかぶってた
ゆうべのふとんありがとう。 (女性 43 歳)

3つの声があってこそ、家庭は明るく健全と言えるということです。・・・話し声・笑い声・歌声です。会話があること。ゆとりとユーモアがあること。台所から聞こえてくるお母さんのハミングなど、やすらぎのある家庭の象徴ですね。(坂西輝雄著「今、こころの時代に」より)

明日から夏休みに入りますので、本日の夏休み前集会で、夏休みは「自律」「感謝」「貢献」のテストの場という話をしました。

1 自分でやると決めたことを計画的に実行してやり遂げる (自律)

2 自分を支えてくれている周りの方に感謝の気持ちを表現する (感謝)

3 地域の行事やボランティアなど、積極的に参加する (貢献)

夏休みはたっぷり時間がありますので、自分のやりたいことが何でもできます。ご家庭でも話題にさせていただいて成長ある夏休みを過ごしていただけたらと思います。



8月15日は終戦記念日です。過去の日本の歴史から、平利について考える機会としましょう。

白いマフラー

それが母子の最後の会話になった

語り部 安田郁子

2005年に『白きマフラー』（鉦脈社）という本を出しました。

戦時中、特攻兵だけが首に白いマフラーを着けることが許されていました。私にとって忘れることのできない思い出がそのマフラーにあり、それで本のタイトルにしました。

私は特攻基地のあった宮崎の赤江海軍基地に勤務していました。そこから385人の若者が飛び立っていきました。

彼らが首に着けていた白いマフラーは軍から支給されたものではありません。着けなくてもいいんです。ただ、特攻兵は17歳から23歳くらいの若い方ですから、死を飾るような想いからか、皆さん自然と着けるようになっていったのです。

氏本成文さんという18歳の青年の方のお話です。

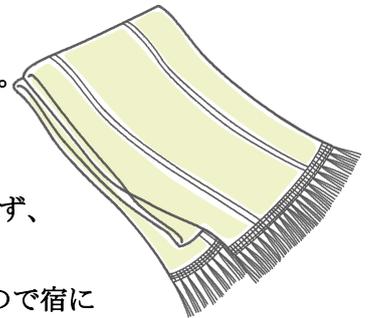
氏本さんは出撃の数日前、四国のお母様に「白いふんどし一枚と絹の白いマフラーを一本、送ってください」と手紙を書きました。その手紙を読んだお母様は思うところがあって、ふんどしとマフラーを持って宮崎の基地まで来られました。

当時は白い布なんて店にはありませんから、お母様はご自分が結婚した時に実家から持ってきた長襦袢の糸をとき、空襲警報下ですから、真っ黒な網をかぶせた電灯の下で、一晩中ふんどしとマフラーを縫ったそうです。

そして翌朝、あちこち空襲で鉄道が不通の中、乗り換え乗り換えしながら宮崎までやって来られたのです。

宮崎の基地に到着すると、基地の人が「今、練習中です。すぐ降りてきます。」と言われました。お母様は息子さんと会ってどれほど嬉しかったことでしょうか。そして、縫い上げた白いマフラーと白いふんどしを息子さんに渡しました。

でもその時、特攻機の飛行練習をしていたとは考えられない状況でした。燃料もなく、空はもうアメリカ軍が支配していて、飛び立つとすぐに撃ち落とされてしまうほどの戦況になっていたからです。



きっとその時は天候が悪くて、出撃したけれども視界が悪くて何も見えず、「無駄死になるから引き返せ」と上官が命令したのだと思います。

マフラーとふんどしを受け取った氏本さんは、「今日はもう練習はないので宿に帰って休んでいてください。今夜行きますから」と言いました。

お母様は旅館に戻られました。2時頃だったそうです。これが親子で交わした最後の会話になりました。

氏本さんは、視界が晴れたその1時間後、特攻機に乗って基地を飛び立って行かれたのでした。

氏本さんはきっと飛び立つ姿をお母様に見せて悲しませたくなかったのだと思います。だから「旅館で待っていてください。今夜行きますから」と言ったのだと思います。

そして氏本さんは、魂になってその夜お母様のところに行かれたのだらうと私は思っています。

その後、お母様は95歳まで長生きされましたが、「あの日のことが人生で一番つらかった」とおっしゃっていたそうです。

私はお母様の気持ちが痛いほど分かります。宮崎の基地で実際にあったお話です。

(2007.1.22号より)